
ウォームハート

瀬戸内むらさき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウォームハート

【Nコード】

N9413K

【作者名】

瀬戸内むらさき

【あらすじ】

私は、冷めた高校生。そんな私は神秘的なクラスメイト、梶原藤子とであったことであるんなものを得ていく。たくさんのウォームハート（温かい心）に触れながら……。

第0話「始まり」

学校帰りの温かい空気の中、革靴の硬い音が響く。徒歩二十分の道のりの途中に、小さな公園がある。私の帰る時間はいつも親子連れで賑わっているが、その前を通るときだけ、私の周りの空気は生暖かくまとわりついてくるのだった。

これはきつと、さびしさに近い気持ちなんだろう。

名前、梅野冷夏^{つめのれいか}。性別、女。年齢、十六。職業、高校一年生。それが私のプロフィール。自分でも、自己紹介にこれはないと思う。でも、それしか出でこないんだからしかたない。だから私は、冷めるとか、大人びるとか、クールだとか言われるのだ。それもしかたない。事実なのだから。こうして割り切ってしまうところにも、そう言われる理由があるのかもしれない。

気づけば、左手に見えてきた見慣れたベージュの壁。私の家。中に入ると、えんえんと鞆を紹介する女の人の声が聞こえてきた。

「ただいま。」

「おかえり、冷夏。」

母はコーヒーを飲みながら、そう返事をした。通販番組を見ている。足元に散らばる妹の教科書を足でどかしながら、私はリビングに腰をおろした。他愛もない会話を交わしたあと、二階へ上がり、自分の部屋に入る。部屋に入った私は、無表情に戻った。もう、仮面をつけるのに慣れてしまった。

私は、母と妹との三人暮らし。母子家庭だ。父は、私が三つの子に病気で亡くなったと聞いた。だから、私は父をあまり覚えていない。古ぼけたアルバムに残っている姿だけが、父の存在だった。ただ、強くて優しい父だったことだけは覚えている。今でも、父がないという実感はない。不意に、ひょっこり帰ってくるような、

そんな気がするのだ。高校生にもなったのだから、そんなことはありえないことくらいとつくに分かりきつっている。しかし、小さい頃に思った小さな思いは、今だなくなることはない。小さい妹がいたから、私は母に甘えないようにしてきた。感情を抑えすぎてきた。そのせいで、私は仮面をつけることを覚えてしまった。

もし、もしまだ父が生きていたとしたら、そんなことはなかったんだろうか。考えたことがなかったわけじゃない。……どのみち、考えたところで何にもならない。そんな理想を並べ立てたところで、今が変わるわけじゃないのだから。自分がむなしくなるだけだ。

ふと、机に立てられた鏡が目に留まった。手に取ると、無表情が目飛び込んできた。この子は誰だ？死んだような黒い目。いったい何を映しているんだろう。……ああ、コレは

ワタシだ。

朝、いつものように学校へ行く。いつもと変わらない朝。そう思いながら家を出た。家を出てすぐの角を曲がったとき、目の前を何か白い塊が横切った。足を止めて、下を見る。……白猫だ。毛並みのいい、白猫。野良だろうか。白猫は前足をぺるぺると舐めた後、私を見上げた。怖がるわけでも、威嚇するわけでも、逃げるわけでもない。ただ、こちらを見上げてくる。青色の瞳で見つめられ、私はまたも自分の目を見てしまいそうで視線をそらした。白猫は短く鳴くと、しっぽをピンと立てて立ち去った。それだけのことなのに、なんだか強烈だった。黒猫は不吉な出来事の予兆だと言われる。なら、逆に白猫はいいことの予兆だろうか。

朝から妙なことがあるものだと、私は笑みを浮かべた。

学校につくと、すぐさま仮面をつける。笑みという仮面。笑みは、頬の筋肉を少し上に上げてやるだけで作れるから簡単だ。だが、笑

み以上の仮面はないと、私はよく分かっている。この仮面の下なら、何を思おうが表に出ることはない。私は、いつもそうしてきた。

廊下を歩いてしていると、青緑色の廊下に不釣り合いな藤色のものが見えた。近寄って拾い上げる。ハンカチだ。誰かが落としたらしい。私は、面倒事まで拾い上げてしまった気がして、苦い顔をした。ハンカチの端に、黒いペンで名前が書いてある。名前を見て、私はやつぱり面倒事を拾ったのだと確信した。

「むつき 梶原 ていこ 藤子」

長く艶やかな黒髪、きりっとした涼しげな目、抜群のスタイル……それが梶原さんで、私のクラスメイトだ。とにかく美人で、頭もいいし、運動もできる。だが、凜としていてだれも寄せ付けないオーラもある。いつもひとりでいるのだ。「孤高の白ゆり」そう呼ぶ男子もいたっけ。

教室に入ると、やはり梶原さんはひとりで本を読んでいた。何をやってても絵になる人だから、なんだかその空間だけ別世界のようを感じる。私は梶原さんとあまり話したことがない。どう声をかけたらいいいのか迷った挙句、当たり障りなく挨拶でいこうと決めた。「おはよう。」

「……おはよう。」
私^が声^をか^けると、梶原^{さん}は^{なん}だ^か驚^いた^様子^だつ^た。何^か、変^だつ^たか^な。ほとん^ど面^識の^ない^私に、声^をか^けら^れた^から^かも^しれ^ない。

「このハンカチ、梶原さんのだよ。廊下に落ちてたよ。」

「あら……、ありがとう。全然気づかなかったわ。」
梶原^{さん}は、や^んわ^りと^笑み^を浮^かべ^て私^から^ハン^カチ^を受^け取^つた。意^外だ。あ^んな^に近^寄り^がた^く思^って^いた^けど、実^際に^話し^てみ^ると、と^ても^人当^たり^がい^いい。こ^れぞ^まさ^しく、百^聞は^一見^にし^かず、と^いう^やつ^なん^だら^う。梶原^{さん}は^本を^閉じ、立^ち上^が

った。

「私、これから用があるの。失礼するわね。……また、お話ししよう。」

皐月原さんはすれ違いざまにそうささやくと、優雅に立ち去った。甘い残り香に、私はなんだか気分がよくなった。

帰り道、校門の前で皐月原さんに会った。私の後ろで、男子が皐月原さんを見て色めきたつ。皐月原さんは私を見て微笑を浮かべた。「またお会いしたわね、梅野さん。……一緒に帰りませんか。」

「うん。……敬語じゃなくていいよ。」

「じゃあ、そうさせてもらうわね。」

まさか方向が一緒だったなんて。帰りながら、私たちはいろんなことを話した。皐月原さん相手に、仮面は必要なかった。自然に笑うことができたから。そんなの久しぶりな気がした。

「そういえば、皐月原さんの家ってどこにあるの?」

「『ウォームハート』って喫茶店、知ってる?」

「うん。洒落た喫茶店だよ。行ったことないけど。」

「私は、その隣の隣に住んでるの。私の姉が、その店に土地を貸してるのよ。今は、店の従業員もかねているわね。……なんなら、行く? 姉に言えば、ケーキくらいご馳走してくれるわ。」

「行く!」

前から、一度は行ってみたかった店だし、ケーキも食べたい。私はすぐさま返事をした。

第1話「愉快な？仲間たち」(前書き)

ひよんなことで謎のクラスメイト、皇月原藤子と知り合った私。彼女は私を、「喫茶店”ウォームハート”へ案内してくれたのだった。

第1話「愉快な？仲間たち」

私の家のすぐ近くにある喫茶店、『ウォームハート』。趣のある洒落たお店で、有名な雑誌にも紹介されたことがあった気がする。常連しか通えないお店らしい。通いたければ、常連の人同伴でなければ入店できないのだ。なぜそんな方法をとるんだろう。いろんなお客さんに来てもらった方が、稼げると思うんだけど……。私がその疑問を口にする、臯月原さんは優雅に微笑んだ。

「人の心を稼ぐことが、商人の仕事なのよ。」
その言葉の意味を掴みかねたまま、私たちは店に着いてしまった。

涼やかなベルの音を響かせながら、臯月原さんは扉を開けた。店の前に休業中の札が立ててあったから、今日は定休日なのだろう。

「みんな、いる？」

臯月原さんがそう呼びかけると、パタパタと軽い足音が聞こえ、少女が奥から出てきた。小学生くらいだろうか。まるい目は、好奇心旺盛に眼鏡の奥で輝いている。

「トーコちゃん、おかえり〜！あれ？友達？めっずらしー！名前なんての？」

早口でまくしたてられ、私は救いを求める視線を臯月原さんに投げかけた。臯月原さんすぐに察し、少女を片手でやんわりと制した。

「キツちゃん、だめよ、まくしたてちゃ。物事には、順序つてもものがあるんだから。」

臯月原さんに注意され、少女は片手で自分の頭をペシンと叩いた。

「あっちゃー、やっちゃった。ウチ、キツサ！これでもここの従業員なのだ！よろしく！」

「私、梅野冷夏。……よろしく。」

せっかちというか、無邪気というか……。とにかくわんぱくな子だ。この子のテンションに、私は合わせられなさそうだ。もとより、無

理して合わせる気などさらさらないが。

騒ぎを聞きつけてか、またひとり姿を現した。キッサにそっくりな子だ。だが、男の子か女の子か分からない。年のせいか中性的で着ている服も、男女どちらともとれる格好だ。キッサが無邪気で明るいのに対し、この子はどこか威風堂々としている。目もすつとした切れ長で、とても理知的だ。

「先程から何事だ、騒々しい。書物を読むもままならんではないか。」

……驚いた。この子、しゃべり方がすごく古風だ。声は凜としていて、やはり男の子か女の子か分からないものだった。

「あーちゃん、お友達だよ！トーコちゃんの！」

「藤子の友……？珍しいことがあるものだ。私はアキサ。このオーナーだ。」

「オーナー?!」

こんな子供がオーナー?!そんなことって、あつていいんだろうか……? いろんな面で、無理があると思うのだが……。

「……オーナーとはいえ、私の勤まらぬものは他の者たちに任せている。オーナーなど、書類上の名があればそれでよい。」

まるで私の心を読んだかのように、アキサはそう言った。なんだか、高飛車なしゃべり方だ。子供らしくなくて、可愛げがない。

可愛げがないのは、私だって同じだけどね……。

「アキサって、女?それとも男?」

私がそう訪ねると、アキサは唇の片端を器用に持ち上げ、笑みをつくった。

「分からずとも構わんだろう。私がおのこであるうと、おなこであるうと、別段何の問題もない。」

「いや……でも、ねえ……。」

確かにそうだ、名前だって呼び捨てで呼ばいいし、性別のことで困ることなんて、あまり考え付かない。でも、なんだか釈然としなかった。

「トーコちゃん、ちつともお友達連れて来ないんだもん。心配しちゃった！他のみんなも紹介するよ！みんな上にいるよ。ついてきて！ウチが案内したげる！」

キツサの後について行きながら、私はちらつと皐月原さんを横目で見た。皐月原さんは、相変わらず涼しい顔をして歩いている。なんとなく、やっぱり私には皐月原さんは分からないなと思った。

上の階も、テーブルがいくつもあった。その中のひとつに、誰かが三人座っていた。キツサはパタパタとテーブルに駆け寄ると、私たちに向かって手招きした。

「紹介するね！このお姉さんがトーコちゃんのお姉ちゃんで、ゆりこさん！」

ゆりこさんは、ゆっくりと頭を下げた。……恐ろしくきれいな人だと思った。皐月原さんとよく似ているが、皐月原さんと違い、ゆりこさんは気品に満ち溢れている。完璧な美しさだ。女の私でさえ、クラクラしてしまうほどだ。

「で、このおっちゃんが……」

「誰がおっちゃんだ、誰が。……俺は猫井天真^{ねこいてんしん}。よろしく。」

「そ、通称ねこてん！」

「いい加減にしろ、チビ！」

「わー、ねこてんが怒ったー！」

キツサと楽しそうに（？）コントを繰り広げている猫井さんは、スリッ姿のおじさん（？）だ。キリッとした目をだるそうにし、無精ひげをはやしている。なかなかかっこいい。

「おい、藤子のダチ。」

「は、はい！」

「言つとくが、俺はこれでも二十八だ。」

「はあ……、え、あ、はい……。」

驚きだ。てつきり三十前半くらいだと思っていた。

「で、あたしが犬飼ヒカル。よろしくね。」

犬飼さんは、明るく長い茶髪を頭の後ろで結び、ワイシャツにデニムのジーパン姿だ。整った顔立ちをしていて、とても親しみやすい。「それでね、この子はトーコちゃんのお友達の梅野冷夏ちゃん！」

「よろしく願います。」

私が頭を下げると、猫井さんがトントンと私の肩を叩いた。

「梅野、もうひとつ言っとくが、犬飼はオンナじゃねえぞ。」

「えええっ?!」

どう見たって、女にしか見えませんけど……!?

「やあねえ。体は男だけど、心は立派なレディよお。ちゃあんと恋だつてしてるのよお？」

犬飼さんはそう言つて、猫井さんに熱い視線を投げかけた。……なんとなく、そう見えた気がした。猫井さんはおもいつきり顔をしかめてみせた。

「なあにが恋だ。」

「あらあ、あたしが熱を上げてるの、あなたひとりなのよお？」

「冗談じゃねえ。てめえがモテるのは、物好きな近所のババアだけだろーが。」

「失礼ねえ。あたし女の人には興味なんてないわよお。あるのはあ・な・た。」

「気色わりい……。俺アナルシストオカマになんて興味ねえんだよ。」

「つれないのねえ……。でも、そんなところが好きなのよねえ。あたし、あなたに一番つり合う女だと思つているのよお？」

「それがナルシストだつってんだ。てめえだつて、もうさんじゅ「それ以上言つたら料理しちゃうわよ？あたしの猫ちゃん？」

恐ろしいくらいにこやかな笑みだ。表情とセリフが全く合っていない。猫井さんは一瞬固まったあと、ため息をつきながら手を軽く振った。

「へーへー、アンタは永遠のハタチですよー。」

「あら、嬉しいこと言つてくれるじゃない。大正解！あたしのこと、

そんなに知ってくれてるのねえ！やっぱりあたしたち、一緒になる運命なのよお……！」

大喜びで猫井さんの腕を取ろうとした犬飼さんだったが、猫井さんはその手をスルリと抜け、席を立った。きよとんとする犬飼さんに、猫井さんはいたずらっぽく笑ってみせた。

「あなた、ハタチなんだろ。俺ア二十八。生憎と、八歳も年下の奴とは付き合えないんでね。」

「え、ちよ、ちよっと！猫ちゃん！そんなのないわよう！」

犬飼さんは呆然と立ち去る猫井さんを見送っていた。明らかに落ち込んでいる。私は慰めの言葉のひとつでもかけてやるのが親切かと思ひ、犬飼さんに声をかけようとした。すると、伸ばしたその手をアキサが遮った。ヤレヤレといった表情を浮かべ、机に突っ伏している犬飼さんを見下ろした。

「犬飼。猫井のあのような態度は常のことであろう。よもや、落ち込んでなどおるまいな？」

「……落ち込んでなんかないわよう。ますます惚れちゃったくらいよお。こうなったら、是が非でも振り向かせてやるんだからねえ！」
犬飼さんは颯爽と（軽く椅子にけつつまづいていたが）立ち去っていった。騒々しい人たちだ。

第2話「突然の雇用」（前書き）

愉快的喫茶店の従業員たちと知り合った私。私とは全然違った個性豊かな人たちに、期待と不安で私の心は揺れるばかりだった。

第2話「突然の雇用」

猫井さんの座っていた席に腰を下ろすと、しばらくしてアキサが紅茶とケーキを持ってきてくれた。甘酸っぱい香りと温かな紅茶の香りに、なんだか心が和らぐような気がした。

「ゆるりとくつろぐがよい。今日は休業だからな。」

そう言っただけで慣れた手つきで紅茶を入れ始めたアキサは、ウエイターの格好をしていた。黒いズボンに白いシャツ、黒のベストを着込み、赤い蝶ネクタイを締めている。ベストの胸ポケットには白いハンカチを入れ、白い手袋をつけた様子は高級レストランの従業員のような赤いラインの入った黒い帽子のつばを軽く上げ、アキサは私に会釈をした。動作のすべてが様になっている。

「……驚いた。アキサ、ウエイターなんだ。じゃあ、やっぱり男の子なの？」

「そうではない。私はヒラヒラしたものを好まぬゆえ、ウエイターをしているだけのことだ。男が看護師になったり、女がパイロットになったりするこの世ぞ。一概に、性別だけで職を判断しないほうがいい。それは、逆もまたしかり、だ。」

アキサは小難しい古風なしゃべり方で、そうスラスラと言っただけだ。不思議と、アキサがそんな古風で高飛車っぽいしゃべり方をするのになんら抵抗はなかった。他の人がこんなしゃべり方をしたらまず引くし、イラっとするものだが、アキサに対しては微塵もそんな感情は起こらなかった。……だけど、よほど使い続けていないとこのしゃべり方はなかなか慣れないもののように思う。アキサは、一体どんな家庭に生まれ育ったんだろう。

「できたぞ。シナモンアップルパイに、アールグレイだ。……もし何か別で紅茶の好みがあれば遠慮なく申し付けてくれ。アールグレイは私のお気に入りだから、残しても私で片付けられる。」

「おいしそう……！私もアールグレイ、好きだから大丈夫。といっ

ても、紅茶なんて滅多に飲まないんだけどね。」

「それもそうだよ。私はここで育ったから食後のティータイムなんて当たり前だったけど、普通はそんなことないものね。」

梶原さんはクスクスと笑ってそう言った。ゆりこさんからティーポットとカップを受け取り、紅茶をカップに注いでいる。梶原さんには、クツキーの皿が置かれた。

「なんかいいなあ、こんな優雅なひとときって。こんなゆったりした時間、他じゃなかなか得られないからさあ。」

私は何気なくそう言った。しかし、その言葉にアキサは笑みを浮かべた。

「左様。日ごろせわしなく生きる者ほど、この時が緩やかに思えるものよ。特に、心が急いておるばかりの者ならなおのこと。……心の安息地無き者は、仮面で誤魔化し道を急ぐ。急いたところで、どのみち行き着く先は同じだというのにな。」

このアキサの言葉に、なんだか心に棘が刺さったような気がした。

アキサは、人の心が読めるんじゃないだろうか。本気でそう思った。

「……冷夏さん。」

不意に、透き通るような声が聞こえた。ゆりこさんだ。今まで紅茶をたしなみ、沈黙を続けていたゆりこさんが、私をまっすぐに見つめている。憂いを帯びた瞳で見つめられ、私はドキリとした。

「は……はい、なんででしょうか。」

私がそう返事を返すと、ゆりこさんはためらうように視線を泳がせたあと、思いきったように私を見つめ直した。

「あなたは……猫井を、どのように思いましたか。」

「猫井さんを……ですか？どうって……」

不思議なことを聞くものだ。そう思った。どうやらゆりこさんには、猫井さんに対する特別な何かがあるようだった。人が遠まわしに言うことは、よほどの状況じゃないかぎり深く追求しないほうがいい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9413k/>

ウォームハート

2011年1月13日00時26分発行